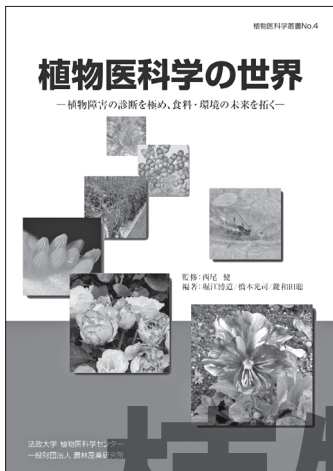


書評

植物医科学の世界
 —植物障害の診断を極め、食料・環境の未来を拓く—
 西尾 健 監修
 堀江博道/橋本光司/鍵和田 聡 編著
 B5判, 391頁, 本体6,481円+税
 株式会社大誠社 (2017年4月30日発行)
 (ISBN 978-4-86518-073-2 C3645)



植物医科学の専門書として法政大学植物医科学センターと農林産業研究所から植物医科学叢書シリーズが出版されている。そのNo.2として2016年に出版された「植物医科学実験マニュアル」は説明が学生向けに懇切であるだけでなく内容が充実していることから、一般の実用書としても利用価値の高い本であることに感銘を受けた。本書は、そのシリーズのNo.4で「植物医科学実験マニュアル」の姉妹本となる。

本書では植物医科学を植物の健康を守るための総合科学ととらえ、目的は植物の健康を損なう生育障害を実践かつ実用的に取り扱うための学問であるとしている。そのため本書は、植物生育障害に関連する植物病害、虫害、生理障害、雑草害等広範な分野の多岐な知見を過不足なく盛り込み、わかりやすく解説している。この本を読めば植物生育異常への実践的な対応に最小限必要な知識や情報が得られるように工夫されており、「植物医科学実験マニュアル」と同様に実用書としても利用価値の高いすぐれものである。

本書は13の章で構成され、各章は独立しているが、冒頭にほかの章とのかかわりの記述があるので、その章で書かれていることの位置づけが容易にわかるようになっている。

I章は、植物医科学の意義や役割を食料や環境問題等

の大きな視点から述べており、植物医科学の重要性を改めて確認できる。II章では、植物生育障害の原因や種類、症状の特徴を整理しており、この章で植物生育障害の基本が把握できる。植物生育障害を起こす生物的要因の中の微生物病について、III章では種類と主な病原体、IV章では発生生態と被害解析が簡明に整理してある。V章では、非生物的要因である生理障害の種類と発生要因を整理するとともに、生理障害と野菜の管理作業との関係を解説している。なかでも主要野菜における生理障害診断の現地事例の紹介は、大いに参考になる。VI章では虫害、VII章では雑草害について、種類や生態、防除法等の要点をわかりやすく述べており、専門書へあたる前に必要な情報はこれでおおよそ足りるのではない。

VIII章では、植物生育障害診断の意義や目的、その工程が書かれている。生育障害は似た症状が多く診断は容易でないが、診断にたどり着くまでの工程が実例に基づき経験を交えながら解説されていて、診断を実践する際に参考となるだけでなく、植物医科学への興味を高める助けにもなるのではない。まさに本書の眼目の章といえる。IX章では、植物生育障害が微生物病と予測される場合にまず必要な病原体の同定や診断の要諦が書かれている。より具体的には「植物医科学実験マニュアル」で補完することになるかもしれないが、その導入として十分な内容が盛り込まれている。X章では、植物生育障害対策の柱である農薬の概要が解説されている。作用機だけでなく、安全性や使用方法にも言及しており、農薬に関する基本的な知識はこれでほぼ十分ではないだろうか。XI章では病害や虫害の防除対策、XII章では植物医科学と関連する行政や法令が再確認できる。XIII章の「植物医科学教育プログラム」は植物医科学がどのように教育されているのかが窺い知れて興味深い。

本書では、本文に関連するトピックや実例等が「ノート」や「ワンポイント・メモ」の欄で紹介、解説されている。この欄は各所に設けられており、内容を身近な知識や情報として興味深く理解し受け取れるように巧みに工夫されている。また、写真が本文中の随所に収載されているだけでなく、そのうちの多くの写真がカラーで口絵に掲載されていることは理解の助けにもなるし楽しい。

植物防疫に関する広範な基礎知識を習得するための研修会を日本植物防疫協会は毎年数回実施している。その研修会には毎回定員を遥かに超える受講希望があり、植物防疫関連業務に新たに携わる人の多いことが窺い知れる。そのような方々を含め、植物防疫など植物生育障害にかかわるすべての方に実用書として、また植物医科学を興味深く俯瞰できる書として本書をお勧めしたい。

(日本植物防疫協会 高橋賢司)